
電波仮想と助長とパスと

初音 柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電波妄想と助長とパスと

【Nコード】

N9041K

【作者名】

初音 柊

【あらすじ】

【現実世界】と同じであって、違う【電波妄想】
銀色に輝く剣。鋭い槍。そんな【電波妄想】ならではの個人個人が扱う武器。

この俺、本坂テルユキはサクラからの教えて武器を召喚、あつさりと召喚されたそれは、もう数学の授業には有り難い代物だった。そして、俺はホナミ率いる文芸部の存続の為に頑張らなきゃいけない、つまりは、逃げられない状況となった。

プロローグ（前書き）

先に言います。この小説を読む時間があつたら、もう少しまともな、
そう、上か下に表示されてる小説を読んだ方がマシです。

でも、時間が有り余るくらいなら、見てもらえると嬉しいです。

プロローグ

最初に暴露してしまうと、文才が無いことに気付いてしまったのはいつだろう。

コミュニケーションとして使う文なら人並み。

キャラクターとして生き生きさせる魅力的な会話、盛り上がる場面での良テンポな文章、シリアス展開での深刻な文字、全てが平均以下のダメな文にしか見えなかった。

自分の文章を客観的に見れることだけが、唯一の良点と言えてしまふ、本末転倒な特技。

それでも、それでも俺は、やっぱり書くことがなんだかんだで好きだったんだ。

1話 ハナシという彼女

最初から回想を入れると、げんなりする人もいるかもしれない。

俺だって物語の初めはワクワクするようなバトル展開、はたまた続きが気になる構図にしたい。ただ、それをやってしまうと、俺の人生はフィクションで嘘になってしまう。

いやー自分の人生を書くとなると、小説のセオリーが通用しないから困った。

とは言え嘘も書けない。

まあ……なんだ、このやり方をやらないと、いろいろと面倒な説明文ばかりになってしまうから、我慢してくれると助かる。

あれは、高校入学前。俺と三神の人生の歯車が噛み合ってしまった瞬間だろう。歯車って、ありきたりな表現方法だが、それ以外に比喩しようもなかった。

短い回想……スタート。

……

……

「……………そうか、なるほど……………。君は素晴らしい考えをできる人
のようだ」

褒められると、むず痒い気持ちになるだけで。

「普通だよ、普通。こんなことで褒められても恥ずかしいだけ」

「そんなことはない、自信を持つといい」

『東井ミサ』は、普段と同じ、柔らかい笑みで俺を見つめている。他から見ると男言葉のような話し方は違和感だろうと思う。だけど慣れきった俺にはこれも普段通りのミサで問題ない。

ミサに褒められたのは、A4サイズの紙を数枚束ね【無題】と書かれた表紙、その物体の内容である。

「この三神って主人公、最後はどうなるんだ？」

「やっぱりハッピーエンドで終わらせようと思う」

そう言っつてストローを口にくわえ、炭酸の効いたレモン系の飲み物をいつきに飲み干す、のは喉が悲鳴を上げたので中断した。ミサが内容を読み終えるまで顔には出さなかったが、内心落ち着かなかつたからだろう、飲み物を注文していたことすら忘れていた。

「ふふふつ、それも君らしい」

真っ直ぐに俺を見つめ、惚れてしまいそうになるくらいの柔らかい笑みをまた浮かべる。より可愛さが増している気もする。

「それで本坂」

今度はニヤニヤ含みの表情に変わる。

「これだけではないんだろう？ まさか大切な昼食時間に小説を読んで欲しいという理由で会いたいわけでは」

「な、なにを言う。いつも読んでもらってるじゃないか」

なにかを言われても、冷静に対応できるように心に準備していた言葉を使う。俺の小説を読むのはミサだけで、いつも読んでもらっているのは嘘ではないし大丈夫なはず。

「まるで準備していたような言葉だ、相変わらず嘘は苦手かい？」

バレバレって怖い。女の勘って怖い。

「う、嘘なわけあるか」

「ならそろそろトイレに行かせてもらっても良いだろうか、そのまま教室に戻って次の授業の用意もしたい。女つていうのは大変だよ」
明らかにわざとだ。なにか確信をもつての発言。

「いや、すみませんでした、はい。あります用事が」
気付かれてるのに、一人芝居をする気力はない。

「さあ、言ってもらおうか」

この質問は、もしかすると本当の意味で気付かれてしまう不安もあった。だけどミサのことだ、気付いていても何も言わないで微笑んでくれるかもしれない。

「いやー、そのーあの。ミサはどここの高校に行くのか聞きたい」

.....

.....

壇上で話す少しだけ頭の寒そうな校長に興味はなく、ふと物思いにふけていた。

入学から一ヶ月後に待っているのは、どうやらやる気の無さらしい。この時期には真新しいことも目新しいことも無く、ようするに心のどこかには緩みのようなものが発生する。

それでも微妙に偏差値の高いこの学校には、その緩みを思いきり表現するような頭の弱い人間もいない。

世界平和を本気で願う俺のこと、何もなく高校生活を過ごしていたいと思う。

そして一ヶ月に四回はあるこの集会は、全ての生徒が体育館へと強制参加で、いつも校長の叱咤激励に始まり愚痴で終わる、なんとも歯切れの悪い集会である。

一ヶ月もの経験と情報があれば、結構なことは理解してるんだらうと自画自賛っぽいことを言ってみる。

相変わらず聞き流すだけの作業の聴覚に、受け止める話し声がかげられる。

「昼飯はどこで食べるん？」

友人と言えば友人になるだらう、お互いに深くは知らないが浅くもないはず。

名前は確か、

「山田花子とか」

「誰が山田花子やねん」

「おっと心の声が」

木坂ホナミ。本坂な俺の名前は、木と本という惜しい差に親近感を覚えたらしい木坂が、トイレから出てきた俺に話し掛けてきたのを記憶している。ファーストコンタクトにしては、なんとも言えない心情。

「まあええけどな。そんで、どこで食べるん？」

「どうせ部室で昼食だらう」

「なんや、今日も部活やなんて青春しとるなー」

「他人事みたいな言い方だな同級生」

「うちはあれや、青春する若者を見るのが青春」

「変わった趣味としか」

朝から昼食の話しなんて気が早過ぎないのか、そんなツッコミに木坂は「ダイエツト中で腹減ってしかたないねん」と答えてくれた。今日もエセ関西弁は軽やかに饒舌のようだ。

そろそろ新入生も気が緩みがちになる季節、勝って兜のなんとやら。

校長の愚痴はそれで終了、各自解散となる。

教室に戻った俺は、一時限の授業の準備を始めた。

無難に授業を受け、空腹という言葉の文字通り腹が空になってきた時間帯には昼食タイムとなっていた。

「ほな、はよ行こか」

チャイムと同時に終了した、授業の束縛解除を合図に木坂がひよこつと俺の前に現れる。顔を覗き込む木坂のショートな髪が垂れる。

「あー、そうだ。ついでに購買に行かない？」

俺は言う。トン、と持った教科書とノートを机に軽く叩き揃える。

「ほな、購買にレッツゴーや」

揃えたけど、なんだかんだで適当に机の中へ放り込んだ。

「うーん」

「どうした」

「うちに似合う消しゴムってどれやるか？」

「それなら……………その青と白がナナメに線が入ったカバーのやつ」

地味に大量な消しゴムの豊富さにはいつも驚くが、見渡したなかでなんとなく木坂に似合う物に指を差す。

「ならこれ買うことにするわ」

「ついでに買ってやるつ、ほら渡せ」

「お、良いん？」

「手書きは大変そうだから」

「おおー、ありがとうや」

「ほお、本坂、青春しているんだな」

東井ミサは、購買部制服の、エプロンに似たその服を着こなしてはそこに居た。ストレートな髪が今日も綺麗に束ねられている。

「な、なにか勘違いしてない？」

「古い知り合いの恋路を邪魔はしないが、せめて声援くらいは送っても構わないだろ？」

「何を言うとするん？ 邪魔して貰った方が恋は燃えるんやけど」

おい、お前らはノリノリだな、おい。

「つてそうだミサ、言っただけだけどおめでとつ」

「何にたいしてだい？」

「生徒会に入ったから」

ああ、そのことか、それを言いたげな納得した表情から変化して、
「激励に感謝しよう」

ひよいとスカートの端を摘んで持ち上げ、お姫様がやるような礼を俺に見せた。いろいろと冗談なのは分かるが、ミサがやると本気にも見えて何とも言えない。

「それとモテモテな本坂に頼み事があるんだが」

「頼み？ なんだよ」

「まあ、伝言の方が正しいかな。暇になったら伝える」

「んー。了解」

それでは、ミサはその言葉を残し去って行った。あ、いや。ミサはその言葉を微笑みながら言っただけで去って行った。こっちの方が正しいかもしれない。

「そや、ついでにインク買ったらどうや？」

「パソコンの印刷に使う？」

「そうやけど？」

「それはパソコン部の友達からタダで貰う約束したから大丈夫」

「そかそか、それなら良いんやけどね」

腕を組んでオーバーに笑う木坂を見ながら、なにげにすっかり者なんだなと俺は思う。

レジまで行くとミサのお出迎えで、手際の良いスムーズなレジ打ちの早さに関心してしまった。

買った物を鞆に入れ、C棟へと向かう。この学校の校舎は、A棟、B棟、C棟で構成されていたりする。クラスの各教室、職員室があるのがA棟。保健室に家庭室や放送室のよう、特別な教室があるのがB棟。

運動部や文化部に縛られず、全ての部活動に使用される部室で構成されているC棟。俺と木坂は、その部室だけで構成されたC棟に用事があった。C棟内部もきっちり構成されていて、外に出る回数が多い運動部は一階や二階付近に部室が多く、移動の少ない文化部は上の階に位置していたりする。

もちろんエレベーターもない。最高四階まであるので、下の階にいる運動部部室が上階にいけば、運動がてら良いのに、と何度思ったことか。

そんな俺は文化部に所属していて、部室は四階に位置している。全く、運動が苦手だから文化部に入ったのに意味がないじゃないか。

C棟、そこはもう基本的に生徒の自由地帯で、何がなんだか分か

らない。壁には部員募集のポスターが至る所に貼られ、試しにその野球部ポスターを朗読してみると『部員！ 求む！ 君も一緒に彼女を作ろう！ 野球部』なんて、ツツコミを入れるためのポスターから始まり、『PKで勝ったら一万円！ サッカー部』と、怪しいものまで色鮮やかなツツコミの練習ができるポスターばかりだ。もちろんこれは色の濃い面子を紹介しただけで、まともなポスターの方が若干は多い。

昼休みとなれば、ほとんどの生徒はC棟に集まり自由な時間を過ごしている。走り回る足音や床に座り雑談する人まで、多種多様の十人十色。

教師に怒られる気もするが、何となく「普段は頑張っているからこれくらいは大目にみよう。ただし、他ではめり張りをし、きちんとルールを守るように」みたいな雰囲気を感じられる。

まあ、学校としてもC棟の自由を対価に、学力の高水準と清く正しい雰囲気での地域への好評価を得るのなら安いほうだろう。

もちろん、生徒も自分達の楽しい自由を守るためにC棟以外の校内生活は、制服の乱れなく、床に座り込んで話すようなことはしないようだ。なんとも分かりやすい人達なんだ。

騒がしい一階を過ぎ、木坂の昼食は楽しみという話を聞きながら二階を過ぎる。ダイエットの理由は、夏になったら海に泳ぎへ行くためということまで聞き、三階を過ぎる頃には静かな廊下を歩きつつ一緒に泳ぎに行こうという誘いに曖昧な返事をし、階段にうんざりしてきたときには無事に四階に到着した。

一階に比べれば騒がしさは雲泥の差がある。文化部に所属する人には内向的なイメージがあるが、間違いではないようだ。

そして俺の参加する部活動、それは、

「そっぴや、なんで本坂は文芸部に入ったん？」

「うおっ?!」

「ん？ どしたん？」

「あ、いやなんでもない。小説書くの好きだったから」

自分の心を読まれているかのようなタイミングには驚いた。

「そっかあ、うちとおんなじ理由やったんやね」

「俺がいなかったら寂しかっただろ部長さん」

「そうかもね」

がちやり、とドアノブに鍵を入れてロックを解除する。

ようこそ文芸部に！ 部員は二人です！

……。

……。

悲しい感じは否めなかった。

木坂ホナミ。文芸部所属。文芸部部长。

本坂テルユキ。文芸部所属。文芸部部員。

なんとも簡単な全紹介である。

昼休みは、いつも通りに談笑しながら飯を食べ、残りの時間に談笑しながら小説のテロップを考える、いつも通りの昼休みだ。

パソコンが一台だけ置いてあり、きつと卒業した顔も知らない先輩が使っていたものだろうと思うのだがあるなら使わせてもらっている。

俺はパソコンで個人の小説を作成、木坂は手書きの方がいろいろと意欲が出るらしく手書きで作成している。パワーバランスとしては良いと思う。

そして昼休み、授業、授業と時間リレーして、現時刻は放課後になる。

もっぱら授業内容を知識として補強することはない。『睡魔に對抗する力に全力を挙げ、そのせいか授業内容に配分する力は見当たらないが、まあ仕方ない』なんて学園物の主人公が言ってるのだが、その通りだ。

俺はただの一般人、しかし授業にやる気がないのは同じ。
まあ仕方ない。

鞆に入った教科書の重たさが、そのまま体の疲れになりそうなので、明日も使う教科書を机の中に入れて軽量化しようとしていたら「あらま、置いといてみ？ 担任に怒られるで」「経験者は語る？」

両方の肩に手を置かれ、頭の上から話し声が急に聞こえたが、俺にフレンドリーに接する女子はこいつを抜いたら他にいない、と思う。

「そーやな、女の子には厳しい重さやったから置いといたら怒られたんや。担任は女の敵や、もう世界大戦勃発やで」

「そっか、よし。それなら部室に置こうか」

「……その方法があつたんや」

「おい」

ニヤリとしているであろう木坂の言葉は聞かなかったことにして、部室に向かう。もちろん教科書は部室に置いておくことにする。

さて、いきなりだが少し見て欲しいものがある。

それは小説だ。

文芸部に所属して一ヶ月。テロップが完成するような本腰で製作したものではなく、ふらっと気まぐれに書いたものについて。部員が二人だからって適当な部活内容ではない、そんなことを証明した

かったからである。

と言つても、完成もせずボツになった短編だ、まあ短すぎるのは許してほしい。

読んでる間に、俺は部室に行くことにする。

【タイトル：無題】

部長的指摘コメント文章

『関西弁は世界一や。あと誤字あったで？ 気をつけたほうが良いんちゃうん？』

毎日、眺める外の景色。

僕はそのどうしようもないくらい飽き飽きとした、外の景色を変えたかった。

どうしたら良いのか、その結果には早く辿り着けた。だけど、どうしたらそれを実行できるのか分からない。

実行に必要なお金もないし権力もない。

そうだ、今から勉強してお金と権力が手に入る仕事に就職したらいいのか。

そこから僕は頑張った。

毎日、勉強をした。

病気になつても勉強した。

そして、頑張ったおかげで一流の大学へ入った。

そこからまた頑張った。

どの仕事に入ったらお金と権力が手に入れられるか調べ、見付かったらその仕事に入るために有利な資格も取得した。

卒業するころには就職活動をする他の人達を尻目に、僕は目標としていた仕事に就職。

そこからもまだ頑張った。

お金は給料のやり繰りで大金を貯金することができたが、ただの

社員では権力がない。

面白い企画書を提出。会社に有益なアイデアを渡す。人柄も良く思われるために愛想よいコミュニケーションもした。

そうして時間が流れるにつれて、私の地位は副社長までになった。わざと副社長を指摘したのだ。

社長になつてしまうと、会社を守るために頑張らなくてはいけない。

私はあの外の景色を変えたいだけだ、そんな面倒なことはしたくない。

そして、あの頃憧れた、外の景色を変える準備ができた。何十年振りだろうか。

ワクワクやドキドキといった心をもったのは。

休暇の日に、秘書を連れてあの景色の場所まで行った。

久しぶりに見に行くあの飽き飽きした景色は、既に変わってしまった。

川は埋め立てられ、木々は刈り取られ、コンビニや駐車場、大型量販店へと既に変わっていたのだ。

私は喜ぶべきだ、必要な経費を抑えることもでき、他人の力で目標が達成されているのにも関わらず、世間から冷めた目で見られる心配もない。

こんなにも有り難い事はない。

しかし、晴れ晴れしい気持ちではなかった。

そして私は行動した。

あの飽き飽きとした景色を、もう一度見るために戻そうと。

相変わらず木坂部長は、眠っていた。いやいや、眠ろうと思つて

寝たんじゃないのは分かる。

書きかけのテロップの上で、すやすや眠っている。限界突破したわけだろうなーと思う。

それが部長の方針なら従うしかないのよ、起こさないようにはしよう。

行き詰まっしてしまい、とっくの昔に電源を落としたPCを前に何と無くすることもなく、ただ椅子に座っていた。いつもはこんなこととはしない。暇になったら校内を歩いたり、他の部活動を見たりと、それなりに暇を潰す行動のパターンがある。

しかし何故だろう、今日はこのままでも良いような気がしている。いや、外に行こうと思えば行ける。

それなのにこうして、ただ待ちぼうけ自分から、みたいな暇を持って余している。

木坂部長の寝顔は、なんだろう、可愛かった、よだれ出てるし。じゃなくて。

俺は椅子から立ち上がった。

なにかないかと必死に必死を混ぜ合わせ考えた結果、用事の件を思い出した。ミサからの用事の件。

俺の自意識過剰かもしれないけど、寝ている木坂を残して行くのは不安な気がする。

この睡眠ペースなら、次期の冬眠も繰り越し延長しそうな勢いで眠っている。

「あぁん……本坂……そこは触らんといてえ……」

……。夢の中の俺、いいか絶対になにもするな。そう思いながら木坂を起こす。起きた木坂は「なんで起こしたーん？ 良いい夢やったのにー」なんて愚痴を言っていたが気にしないことにする。

あーだこーだと愚痴る木坂とたわいもない口論をしながら、気付けば棟から離れていた。そしてもう一つ気付けば、そっぴや木坂も同行していた。

苦いコーヒーを飲み込めないような、もやもやしたなにかもありはしたけども、今更引き返せと言う度胸もなく、まあミサが何も言わなければ木坂が居ても問題はないだろう。

井東ミサ……は、古くからの知り合いで幼なじみと言っても良い。騎士のような話し方が確立していたのは、曖昧ながら小学生からだったように思う。

性格も騎士道のなんたるかを知っているかのような性格で、正々堂々、これがピッタリな人もいないように思える。

出会った十数年の経験から言えるのは、あんなに格好良い女性はこれから俺の人生でもそうそういないんじゃないかと言い切れるくらいだ。

「なんでにやけてるん？」

「に、にやけてない」

木坂の読心術は、評価に値してしまふ。今度からは気をつけよう。「あ、そうだ。ミサがどこにいるか分かる？」

多分あそこだろう、程度の情報しか持ってなかったから、どうせなら確信した情報が欲しかった、木坂なら知っているかもしれない。「それやったら知ってるで」

「よし、それはどこ？」

「井東さんならもう帰ったんやけど、ほら？ あのー教科書を机の中に入れたら怒られるーって話してたときに」

「なら部室からここまで降りて来た意味を見失ったぞ。なんてこつた、またあの四階を駆け上がるのか」

「井東さんに用事あったん？ なら言ってくれたら良かったんやけ

ど？」

「木坂がいても、ミサは何も言わないし大丈夫だと思う」

「ちやう、まだ寝たかった」

「そっちかよ！」

運動不足が仇となってしまい、部室に到着するころには心拍数は平均以上の数値になっていた。部室に戻る途中で木坂の階段を駆け上がるスピードが速くなり、いつしか争いになり、負けたくなくて、走って、疲れた。

ばか木坂め。

そのあと俺達は、というか俺は、いつものように部活動を終えた。木坂はまた寝ていた。

「おい木坂。教科書置いて帰るから、明日は早く部室に来いよ、聞いているのか？ 部長が鍵を持って来ないと大変なことになるんだぞ」

「うーん……」

「聞いているのか、これ」

不安ながらも心地良く寝ている人を起こすのは、俺の良心が痛むのでこれ以上はなにも言わない方がいいだろう。

俺はこのまま木坂も置いて帰ることにする。木坂はこのあと体育館で行われる、町内の物好きな老人達に空手を教える指導をしなければいけない。

「またな、このあと頑張れよ」

「ほなまたなー……」

「聞いているのか、これ」

学校で木坂とわかれ、家に帰宅する頃には日が沈み始め、今日一日も、そろそろ終わりそうだ。

よると、残業の終わったサラリーマンのようにベッドに倒れ込んだ俺は、そのまま目を閉じて夢の世界に入ろうとしたのだが、

「ねえ！ 遊ぼうよ！」
「遊ぼう遊ぼう！」

弟と妹の無邪気な圧倒的武力によって叩き起こされた。

本坂ミクと本坂リク。

俺に似ずに可愛い顔をした双子の弟妹が夜空に輝く一等星のような、汚れの無い目で俺を見ている。

ただ、体力ゲージ点滅中の俺にとっては、その聖なる光りによって致命的なダメージを受けている。俺は閻属性かもしれないが、遊んでやることにして、解放されたときには、まさに死ぬように眠っていた。

しかし、

「おいテルユキ起きろ〜」

「……………」

「起きないと……………こうだから〜」

「……………痛いっ！！ 痛い痛い痛い！！」

今度は酒臭い姉によく分からないプロレス技かなにかをかけられ、

「な、なに」

「久しぶりにゲームしよう」

「い、今は何時だと思う」

「んー、四時半」

「今日も学校だから寝たい……………。あと姉ちゃんも仕事あるだろ」

「今日は休みなのら！ そしてお姉ちゃんの言うことが聞けないならこうだ！」

「分かった分かった分かった分かった分かった！　だから止めよう！」

俺に力があつたなら、この知らない技から抜け出せただろう。そんなことを思いながら朝まで姉に付き合わされることになる。

……いつか俺の部屋に鍵を取り付けたいと思う。

目覚ましが起きる合図を知らせる、その前に起床。これを自分自身で成せたなら、清々しい朝になっただろう。

今の俺は清々しくないし、というか清々しいのは俺ではない。

「朝は良いぞ。しゃきりとできる。うん、スタートという感じもするし」

この騎士様は規則正しい生活なのは、なんと無く想像できる。だからって生活環境を他人に押し付けるのはダメだよ。

「あと三時間だけ寝かせてくれ……」

「今、たった今、起きたのなら。どうせならそのまま起きてくれないだろうか？　私の我が儘で……すまない気もしてしまうが……、悪い事をやっているつもりもない。構わないだろ？」

「あと……二分……」

「起きないとキスするぞ？」

「……はえ?!」

「嘘っぱちだよ、君の姉はやはり君の事を知っているようだ」

「それで、なんでまたミサが？」

目の覚める言葉のおかげか、あのあと一向に眠たくはならなかった。姉の策略に負けた気がして、朝から陰鬱となりながらも姉に感謝しよう。

「君の姉に頼まれたからだよ」

「断った方が良いんじゃないか」

「昨日は朝方まで付き合わされたと聞いた、それが原因で遅刻されても困るそうだ。それで、確実に起床させる為に私が派遣された、そういうわけだ」

「なるほど、適任な役職」

身支度の終わった俺は、朝から眠い冴えない顔でミサを見ていた。元から冴えない顔だろって言うな、現実は厳しいんだ。

「あれ、それで姉ちゃんは今？ 今日休みじゃなかったけ」

「未だに成長している胸の大きさにちょうど良い下着を買いに行くと言っていた」

聞かなきゃよかった。

「私も女として君の姉を羨ましいと思ってしまう」

羨望の眼差しは俺ではなくて、姉にしてくれ。

「あ、なら朝食は買おうとするか」

「ふふっ、本坂。胸はないが私も女の端くれだぞ？」

「幼なじみが朝食を作ってくれるのは現実では存在しないイベントと思っただ」

「ゆで卵しか作れないが」

「やっぱり現実は厳しい」

うん、無難にコンビニ弁当を買うことにした。

学校へ向かう最中、いろいろと懐かしいと感じていた。

小学校に所属していた頃は、まだ善悪の判断ができない未熟な子供、集団で行動して不審者から身を守るという方法を親に取らされていた。集団と言ってもミサと二人だったけど。

中学生になれば、誰が悪い奴かくらい判断できるようになり、知らず知らずにミサと登校や下校をしなくなっていた。

昔と同じ体験しているとすれば懐かしい思いになるのは当然の摂理。

なんだか年寄りみたいだけど。

たわいない会話を繰り広げていたらいつのまにか高校に到着していた。

楽しい時間は勢いよく過ぎていった。

重要なことだけ言えば、今日の昼休みにミサに会わなければいけないことだろう。

校門でミサと別れ、俺は迅速に行動する。部室に置いていた教科書を拾わなければいけない。

上履きに履きかえる前に、木坂がいるのか確認のため寄り道することにして、正面口を見据えつつグラウンドに向かう通路を進み、グラウンド側から文芸部室の見える四階を見上げる。窓もカーテンも閉じられ、明らかに無人の気配だ。

何故か、にやける木坂部長の表情が思い浮かび、とっちめてやろうと考えたが、まあまだ時間はあるさと言い聞かせる。さて、教室に行こうかと思っただら、

「その君っ！！」

早朝ということもあり、人のいない静かなグラウンドに声が響いた。その君、とは俺のことの間違いなさそうだ。

視線を声の方へ向けると、そこには金色の髪をした長髪で、顔の整っている、なのに寝癖付きな、

「木坂は誘拐した!」

可愛い人がいた、じゃなくて、ええええ?! い、今、なんて言
ったこの人は。

「木坂ホナミは私が誘拐した!」

いきなり誘拐って言われたが、なんなんだ。
唸っていると、

「だから木坂ちゃんは誘拐したんだって……」

なんだ、その助けてあげた方が良いんじゃないのかい、みたいな
視線は。

「えーと……なんで誘拐を?」

「いけにえに捧げて雨を降らせるのさ!」

「降らせるのさ! じゃなくて」

「嘘だよ! 木坂ちゃんはね、ほら! 部室に居るよ! おかしいよ
ね! 参加しないなんて!」

「会話のキャッチボール……」

「あ、そろそろ行かなきゃ。私の名前はサクラ、君の名前は?」

「本坂テルユキ」

「オーケー、テルユキ君。今度あったら手作り弁当でも持ってくる。
それじゃっ!」

サクラと名乗る少女は、スカート翻し颯爽と駆け足で去って行っ
た。

意味を求めても意味は無く、ただ呆然と漠然の中間地点にいる俺
は数秒して動きを始めた。

なんだっ たんだ?

再度、文芸部室四階を見上げると、窓とカーテンの開け広げられ
ていることに気が付いたと同時に我に返った。

俺は、金色の髪をした少女の立っていた場所を数秒だけ見つめは、
正面玄関へ向かった。見つめた行動に意味は無い、はず。

「なんや、眠そうな顔しとるな」

「……カッコイイ顔じゃなくて悪かったな」

時間は早々と経過し、昼食時間もとい休み時間もとい昼休みが始まった。

教科書の件は遅れてやってきた木坂の、上目遣いテヘツ、な謝罪だったので頭を軽く叩くだけにした。

「どんな顔でも嫁さんはくるって、安心しとき」

「どんな顔でもって」

「そんなことはいいんや、はよう部活に行つて活動タイムや」

「そういえば、平凡な日でも昼休みに部活があるのは文芸部だけじゃない？」

「うん、そうやけど？」

「なんで昼休みにも部活があるんだ？」

「なんでやろうね、そんなことよりも、はよう部活行こう」

「はぐらかすなよ」

「んな、顧問に聞いてもらわへんとうちは知らん」

「部長だろ」

「痛いところを突かれたわ……」

「あ、そうだ。先に行つてていいぞ。あとから行く」

「んー了解や、なんか用事でもあるん？」

「あるんやー」

「真似するな！」

「へいへい」

ノリノリでツッコミを入れて来た木坂の笑顔が何となく印章に残った、教科書を机の中に放り、そそくさとミサのところに向かうことにした。

今の時間帯なら、購買で店員さんでもやっているはずだろう。

俺の予想は半分のみ当たっていた。

「やあ、待ってたよ本坂」

購買にはいたが、店員さんではなかった。本人に聞いてみると、どうやら休憩中らしい。パイプ椅子に座って昼食中だ。

ミサの担当は用具関係らしく、隣の食品関係の客の賑やかさと比較しても明らかにこちらの人数は少ない。「楽な仕事で申し訳ないね」と言いつつも微笑んでいた。

「それで、用件は？」

「ちよつとこれを見てほしい」

食べかけのあんパンを膝に起き、椅子の横に置いてある鞆からひよいとなにかを取り出す。それを俺に渡す。

「私の知人に渡されたんだ」

「……ゲームソフトだな」

勇者の持つような剣を空に掲げて、希望溢れるようなイラストが描かれている。

「なんでゲームソフト？」

「前の学校ではバスケット部に所属していた知人が、親御さんの都合で転校することになったという、この学校のバスケット部は強かったかな？ いや、話しが逸れたか。その知人に是非ともやって欲しいと言われ渡されたんだ」

「……なるほどね」

話し方は男っぽいが、見た目は可愛いミサのこと。バスケット部ってことは男だろう、その男が少しでもミサに近付こうとする作戦だと俺は予想した。

「それをなんで俺に？」

「私はそのゲーム機の本体を持っていなくてね、宝の持ち腐れになるくらいなら本坂にやってもらいたい」

「いや、それなら良いけどさ」

「あともう一つだけ……これは用事というよりも、頼み事と言った方がいいかもしれないが」

「なんだ」

「内容は聞かないでくれ、それを約束してほしい」

ほがらか、そんな表情とは言い難い。決心した表情、そんな言葉がピッタリかもしれない。俺の頷きを見て話し出す、

「本当は参加してもらいたくはない、このまま本坂には楽しい高校生活を過ごしてもらいたいんだ。例えばの話になるのだが……私とテル君が敵対しても……全力を出してほしい」

話しの内容は、全く意味が不明だった。普通なら理由を聞くのだが、内容を聞かないと約束してしまったからには何も言えない。ジヨークだろうとも思った、だけど昔の愛称で俺を呼ぶミサを冗談だとは思えない。

「それでは私も営業再開としようか、休憩時間も終わりそうだからね。ありがとう本坂、また話そう」

椅子から立ち上がり、にこやかな笑みを残して関係者専用入口に入って行った。

今日は変なことが多い日だ、これで木坂にも何かあったら誰かの策略としか思えない。

そんな俺の心配とは違い、いつもながらの木坂だった。

部室での部長の仕事、睡眠時間を補っているその寝顔は、相変わらず馬鹿が付くような幸せそうなものだった。

時刻は七時を過ぎた頃だろうか。家に帰宅した俺は、昨日のようにダラけてはいなかった。

ミサから預かったゲームをする気にはならず、俺もゲーム離れしてきたのか、なんて思いながら、どうせその扉の後ろに待機して、どう突入するか作戦会議中のリクとミクの相手をしてやろうと思う。なんだかんだで可愛い弟と妹だ、良いお兄ちゃんと思われないという下心と純粹に楽しませてあげたいという、生々しくも明確な行動理由を持って接してみる。

悪いことをしない良い子になる道標くらいなら、俺にだってなれるだろう。

頼むから、弟と妹よ、特に妹、姉を見習うのだけは勘弁してください。おしとやかで可憐な女性になるんだ。

こっそりと扉を開いて、ばれてないつもりで部屋を覗き込んでいるリクとミクに、引き出しから取り出したトランプを見せて笑ってみることにした。

「トランプのタワーでも作るか」

「うんっ！ 作るう！」

「わーいっ！」

「っ、疲れた……」

中盤は、崩れ落ちるトランプタワーを見る方にシフトしたようで、俺の集中力によって積み上げられた器用の産物を、ミクのふー、と吐く息によって崩壊、それを悔しがる俺、そして大爆笑のリク。

終盤には帰宅してきた姉も参加し、というか邪魔をしに参加、さすがの俺もゴールの見えないこの作業に嫌気がさして投げ出す頃には「っ、疲れた……」となっていた。

さつさと風呂に入って、寝ることにした。

次の日、思っていたより快調な一日の始まりだった。昨日の疲れを今日に持ち越さないのは、若さの成せる回復力だけに、年齢を重ねるこれからは疲れてしまうのか……そう思うと……疲れてきた。「行つてきまーす」

たまには良いだろう、いつもは言わない挨拶で家を出るのも。

これで外が快晴なら言うことはなかっただろうね。土砂降りの一日という天気予報を見たおかげで、心情負荷は軽減されたけどさ。無地の透明な傘に当たる雨粒を見上げ、これが飲み水となるのかと知ってしまったている俺は複雑な心境。

水なんとか機関みたいな会社の人達が水に含まれる汚れを取り除いて、水道を通つては飲み水となる。

知的なことを言ってみたが、詳しくは知らないで底が浅い知識人として頑張ろう。無音ではない足音と雨音を聞きながら、学校の校門が見えたとき。

俺の見ていた現実がぶれた。

なんだ、今のは。

ゲームのスイッチを起動したときの、テレビ画面の初動のぶれみたいなの、残像？ いや、違う、俺が口で言えばブインみたいなの起動したときの映像の揺らぎ。

目を凝らしてそこら辺の物を見ていたが、バカバカしくなつて止めた。

直立不動の、トマレという標識を見ている自分の頭を殴りたくなる。なにを真剣に見てたんだ。どうやら危ないのは目じゃなくて、頭の方かもしれない。

さつさと、校門に入りつつも目を擦る。昨日はまさに、目を一杯使ったせいだろう。

疲れがで、

「そのバカ。武装せずに何故こんな所に来ている」

武装？ 学校に制服姿は完璧な武装だと思うわっ？！

「聞いているのか」

「な、なんだ……その大剣……」

俺の背丈を悠々と超えている剣は、太陽の光りを反射させ、切るより叩くに近いであろう形状である。

余りにも学校とは不釣り合いの光景に、動揺してしまった。

「はあ？ 戦闘フィールドで武器を持つのが変なのかよ」

「受験生なら学校は戦闘フィールドだろうけど、その……模造の剣をこつちに向けないでくれ。段ボールで造ったのか？ それなら凄いなと思うが」

絶賛を贈りつつ、そのまま校舎に向かおうとしたのだが、

「ふざけんなっ！ 俺は二年のミチルギっ！ お前の名は！」

「……テルユキ」

「よし、名は聞いた。おりゃあああー！」

迫る大剣、振り下ろされるそれは俺の頭上。はい？ なぜそれは俺に向かって振り下ろされるんだ？ 理解できず、反応が遅れてしまふ。

疑問に支配された体は、動くことすらしない。

現実離れたこの現実には、俺は適用なんて、できていない。

これ、大剣が本物だったら死んだな、そんなシニールを冷静に分析していたら、

「おりやつ!!」

「うお!？」

今度はなんだ、俺に一直線と振り下ろされていた大剣が、停止した。

いや、正確には停止ではないかもしれない。

「やつほーテルユキくん、ごめんねー。お弁当持ってこなかった」

「なんでお前がいるんだ……」

昨日、見た、サクラと名乗る少女が俺の前に立っていた。手に持っているのは槍だろうか、その槍を使って大剣を止めてた。

ますます意味が分からない、なんなんだこの絵図は。

「あれれ？ バトル学区なのになんで何も持ってないの？」

バトル学区？ 初めて聞いた言葉に困惑してしまう。

俺が悩んでいるのと同時に、サクラは受け止めていた槍で大剣を振り払っていた。

やはり威力の高そうな大剣だけあって、振り払われるとその重さで重心がずれ、立て直そうとするさなか大きな隙が生まれ、初心者に近い俺にすらそこが攻撃ポイントだと分かってしまう。

「うりやつ!!」

サクラの改心の一撃だろう。声を出してまでの気合いを入れ、リーチの長さを生かしての攻撃。

ミチルギと名乗った先輩の頭上付近に、数字が現れた。

『27/100』

すると、サクラの攻撃によってその数字は変化し、

『0/100』

と、表示された。

多分だが、ミチルギ先輩のHPや体力のような類だろう。

俺は表示されていたそれを見つめていたら、

「く、くそ！ 負けた!」

その言葉を言ったあと、ミチルギ先輩は消えた。さっきも見た、映像のぶれ、映像の揺らぎを残して。

「よかつたー、他の所と戦つてたのかな？ 体力もともと低かつたよねー？」

「サクラ……なんなんだこれは」

気が付けば、俺の手から離れていた学生靴を拾うサクラを見ながら言った。

「んーとね、電波仮想だぜー。だぜー」

話し口調が統一していないサクラから、学生靴を受け取り俺は周りを見渡す。

普通だ、いつもの校舎、いつもの空、いつもの見慣れた日常、変わった所なんて……いや、違う。人の姿が見当たらない。

朝の登校時間まで、まだ時間はあるが、一人も登校者がいないのはおかしい。いつもなら結構な数の登校者がいるはず。

サクラは電波仮想と説明した、なら……

「ここは俺の知ってる世界じゃないのか？」

実際は数秒だろう、ただ、聞いた俺にはそれよりも長らく感じたはずだ。

「そう、ここは特別な世界なんだ、テルユキ君」

サクラは、そう言った。

俺はいつもの学生服。ここにある靴だって、どう見ても俺の使っているいつもの靴。

「信じられるか」

ミチルギ先輩とサクラが、騙しているとしか思えない。

ありえるか、目の錯覚。生徒が誰もいないのは、学生全員で俺を騙しているのだろう。なんのためかは知らないが。

「ならミチルギ君が消えたのはどう説明すんのさー」

「そ、それは……」

反論しようにも、物理法則に人が消える式はないだろう。口ごもつてなにも言えない俺に、サクラは追撃としては完璧な言葉を言った。

「テルユキ君、頭上を見なさい」

「頭上？」

……。特に変わったことはない。青空が広がり、恒星である太陽が平等に光を降り注いでいる。こんな日常を見たら、ますますサクラの言うことが嘘のように思える。

「普通……じゃないか……。ほら、サクラにだってあの青空が見え……あ」

もやもやして、引つ掛かりの残っていた心の霧がなくなる。気付いてしまった。

いつもの日常に、ここは違う世界なんだと気付かされる奇妙な感覚。

「今日は……土砂降りの雨じゃなかったのか」
晴れきった、雨とは無縁のこの世界で俺は、にやけた顔のサクラを見ながら言う。

天気をサクラが変えるのと、電波仮想の世界、どちらかを信じなければいけないなら、無難に電波仮想を信じるしか他になかった。

間章

時刻、一時頃、昼休み。

本来なら部室に行き、木坂と昼食しながら談笑しているはずだ。
あの出来事が無ければ、だが。

今朝からこの今まで、授業を真剣に聞けるほど、俺の心は広くはないわけで、一つの単語すら覚えていない。それでも平常心を保てたのは、俺の力量だろうと思う。

現在の場所は屋上。

サクラからの説明を受けるには、内容が内容だけにやはり人気の無い場所を選ぶ必要がある、基本的に棟で過ごす生徒が多いせいかこういう場所は無人、まさにうってつけであった。

「いや、さっぱり分からない」
自分自身の理解力が乏しいわけじゃないが、それなのにサクラの言う意味が分からない。

「だーかーらー。戦って勝ってポイント集めて、部費とかの割り当て決めたり順位を上にしたたりするんだって！」

これは、逆切れだろうか。
「いまだに信じられないんだが」

俺はわざとらしく腕を組んで、聞く体勢をやってはいるが、底の浅い知識人には格好だけでもちろん意味はない。

「ってなんで信じてないの！　なんで信じてないのに電波仮想に来てるの！　なんでカレーライスにゆで卵を入れたら美味しいの？！」

ねえ！　なんでゆで卵入れたら美味しいの！！」

「好みの問題じゃないのか」

ダメだ、もつと説明とぶれない発言ができる人を連れて来てほしい。

「取り敢えずテルユキ君に言いたいことがあります」

無駄に、いや、無意味に真剣な顔をしているサクラ、仕方なく俺も真面目な顔をして聞くことにする。

「テルユキ君が、電波仮想に来たってことは今朝みたいに襲ってくる人もいるから気をつけなさい」

どうやらこれは、本当のことだろう。気をつけなきゃいけない。

「だから武器を出そう！」

「どうやって」

「まずは電波仮想に行こう」

「どうやって」

「そうだ！　ついでに敵を倒そうよ！」

「どうやって」

むすっ、としたサクラにジョークと言いつつも、頬を膨らます不機嫌さは治りそうもない。

「じゃっ、私は先に行くからね」

待てっ。

と、俺の言葉を聞く前に、サクラは消えてしまった。サクラの立っていた空間が少しズレていたが、数秒で元通り。

……………、やっぱり電波仮想は本当なのか。

否応なしに現実許容範囲の広がる感覚を見せ付けられると、苦笑いしかないな。

さて、どうしたもんか。

電波仮想への行き方を教えてもらってない。

どうやらサクラは一人で突っ走る性格のようだ。

「どうしると……」

俺の呟きは虚しい屋上へと、風が運んだ。

2話 電波仮想という世界

屋上には、人もそんなに来ないのにベンチがあつて、そこに座っている。前を見ても、雨が降っているだけだ。

上を見る、雨の粒を防いでいるコンクリートの屋根がある。

横には、誰もいない。さっきはいたけど、今はどこかに消えてしまった。

「遅いつ！」

瞬間移動よろしく的に横に現れたサクラは、逆切れ過ぎる睨みで俺を見ていた。

勝手に電波仮想に行つておいて、なんで文句を言われなきゃいけないんだろうか。電波仮想に行く方法が分からない俺には、どうしようもない。

……今朝の出来事から、時間は経過していた。

昼休みの今は、C棟部室で木坂と会話しているはずだが、なんせ無視のできない事柄だけに普通に生活するわけにはいかない。

今から俺は、参加者としてのルールの教えを聞くために、サクラと電波仮想とやらに行くことになったのだが、なにを考えてるのか、行き方も教えてもらってないのに先に行かれ、そして戻ってきて逆切れされている。

理不尽とはこのことである。

「あのさ、まずは電波仮想の行き方を教えてくれ」

「そうでした」

「……やれやれ」

冷静なクールを装ってはいるが、内心はドキドキしている。俺もミチルギ先輩のような、格好良い武器を持てると思っただけで、テ

ンシヨンは直角に急上昇。

鉄砲刀剣類所持等取締法。

略して銃刀法なんて法律があるが、きつと干渉されてはいないだろう。

サクラが言うには、削除、つまり戦いに負け体力（HP？）がゼロになったとしても、削除＝死、ではないらしく、好きなだけ暴れても良いという。

少年の心をくすぐるイベントがあるのに、ドキドキしない奴はいない。

刀なんて良いよな、日本刀みたいな。一撃必殺、うりやつみたいな。

「お一人様、電波妄想へのご案内」

サクラの一言で、また、俺の見ていた現実がぶれた。

それも一瞬のことだ。

俺はまだベンチに座っている。座り心地に違和感はなく、異変は感じられない。

だが、ここは電波妄想だ。

ぽかぽか陽気が俺を照らす。雨音と雨粒は消え去り、そんなもの最初からなかったと主張しているようでもある。

そしてもう一つ違うのは、

「なんで、なんでお前は」

ドレスを着てるんだ？ と、サクラに言おうとしたんだが、知り合いの声が遮る。

「さて、私はいつものように点数を稼がないといけない。本坂、そしてそこのお嬢さん、始めよう」

俺は即座に立ち上がる、遮られたことはもうどうでもいい。

瞬間的に登場した、その人物に思い当たる節がある。

「……ミサ？」

騎士のような話し方、堂々とした立ち振る舞いは知り合いに一人しかない。ミサの着ている服は、サクラのドレスに似た感じで、さ

らに安易な鎧を合わせたような服、女性らしさと騎士とを融合させているような一品。

「そうだが？」

「やっぱりか！ お前もここに来れるんだな、俺もついさっき」

馬鹿みたいに嬉しそうにしていた俺は、多少だが青ざめる。

「そんなことはどうでもいい、早く始めないか」

具現されたそれは、何も持っていなかったはずのミサの手に現れた。

両刃の剣という言葉があるが、その言葉の元となった剣。

剣の種類に詳しくない俺には正式な名前が分からないが、剣が封じられている鞘をミサは握っている。

いつものように無表情だが、いつものように優しさを感じる雰囲気、その雰囲気だけは出してはいない。顔が無表情ということは同じだが、雰囲気が違う、それだけで別人のような印象を受けてしまう。

鞘と剣とが擦れる金属音、鞘から解放された剣は銀色に輝いていた。

女騎士、伊東ミサにはお似合いだろう。

用済みとなった鞘は、現れた時のように、瞬間的に消えた。

気が付けば、サクラも武器を手に持っている。今朝に見た、俺を救ってくれたあの槍だ。

「はあああ！！」

先手必勝とばかりにサクラが走り出す、リーチとしては圧倒的にサクラが有利。

突き出される槍。

槍の突き進む先には、銀色の剣が待っており、簡単に受け流されてしまう。

先の部分は鋭利でダメージを受けてしまつとしても、そのリーチの元である棒部分は言ってしまうえばただの棒である。

よつするに、

「そこだつー！」

切り付けるミサ、サクラは辛うじて身を引いたもののが本物だつたら致命傷になりうるかもしれない。

槍の弱点は、誰から見ても分かるように接近戦では小回りができないところじゃないだろうか。

『100 / 100』

頭上に表示されるパラメータ。数字は変動し、

『47 / 100』

一撃で五十%以上を削られている。

明らかにサクラは分が悪い。このまま続けても勝算はない。

先の一撃を見たサクラは、防戦一方になってしまっている。

一撃でも当たってしまったと、アウトの可能性もあるという心境がそうさせているのかもしれない。

『47 / 100』

『20 / 100』

確実に減っている数値。

サクラは、俺を守る為に戦っている。

ミサの俺への接近を、サクラの邪魔によって阻止して、紙一重でその作業を行う。

ただ見ている俺には、サクラを助けることもできない。

……どうしたらいいんだ。

『20 / 100』

『3 / 100』

一撃でも、確実にアウトになってしまう数値となる。

「はあ……はあ……」

華奢な肩が上下し、息の荒れているのは、後手のサクラだ。

ミサは無表情に剣を構える。

今回は相性が悪かった、接近特化のミサ、接近戦では攻撃すらできないサクラ、明らかに結果は分かりきっている。

走り出す女騎士は、銀色に輝く剣を振り上げる。

結果の分かっている姫は、白銀の槍を斜に構え、攻撃を対処する気力もない。

俺は、なにもできない自分に苛立ちだけが積もる。

(いいのか、助けなくて)

反復するその言葉。

俺は全力で走っていた。

作戦なんてものは、これっぽっちも考えていない。さーで、どうしたもんか。

このまま走っても、ミサがサクラに攻撃する方が先だろう。

アニメ的マンガ的な、ギリギリで剣を受け止める、そんな間に合う余裕はない。

(それなら……)

サクラへと銀色の剣が一線に落ちかけた時、

「スキありっ！！」

俺は叫んだ。

もちろんスキはあっても攻撃手段はない、ただのはったり。

手ぶらな奴に、スキありと叫ばれても鼻で笑うのが一般的だろうと思う。

それでも、それでもミサは中断して後ろに下がった。

それはそうだろう。

俺は武器を持っていない。だけど相手側からしたら、つまりはミ

サに武器を見せていないことにもなる。

なんの武器を持っていいのか分からない状態の敵に、スキありと叫ばれたら下がるはず。

そして圧倒的優勢のミサが、無理をしてまでサクラに一撃を入れる道理はない。

内心は、これが成功してよかったと思っている。

ダメだったら、サクラ消失、俺は無力、女騎士ミサの剣技、そのあとに待っている結果なんて考えなくても分かりそうだ。

「ミサ、一つだけ言いたい」

俺はミサを見据えて、言った。

「武器の出し方を教えてくれ」

ある意味で、空気が凍り付いた時間が流れた。

敵意を向けられ構えられていた剣が、鞘に戻される。

戻されたというより、瞬間的に登場した鞘が、構えられた剣に覆いかぶさるように現れただけだ。

「……やはり君は優しいな」

敵意の有無はスルーしても、井東ミサはいつもの井東ミサだ。俺の憧れる井東ミサ。

「一時休戦しよう。私は本坂が既に理解しているものだと思っていたが……私は武器を構えない相手と戦う程に、落ちぶれてはいないつもりだ」

消え去る剣。

「本坂、武器の出し方なんてものは決まりがない。ヒントなら、そのお嬢さんに聞いてくれ」

その言葉を残して、電波仮想からミサは消えた。

例えばの話しになるが、ミサが俺の古くからの知り合い、じゃなくても一時休戦は望めただろう。

やはり正々堂々が似合う奴だ。

「……、よし今日は帰るか」

「そう……だね、今日はもう戻ろっか……」

意気消沈しているサクラ、圧倒的な力差で負けたらさらに疲れも溜まるだろう。

笑顔は消え、頬を膨らませて不機嫌を表している。超不機嫌。

まあ、元氣そうだ。

そして、今、気付いた。

もしサクラが負け、電波仮想から消えていたら、俺はどうやって帰ればよかったんだろう。

「どうしたん？　なんかアホっぽい顔して」

「顔にたいして文句があるなら親に言え」

後ろから抱き着く一歩手前、そんなボディータッチを木坂から受けるが、ただたんに肩を揉まれているだけである。

今日最後の授業も終わり、さて今から部屋に行きますか、と思っ
ていると、

「自動マツサージ機もとい木坂ホナミさんがやってきた」

「いきなりどしたん」

「いや、今日も木坂は可愛いなーって」

「結婚してくれるんなら、付き合っただけでもええよ」

「凄じい上から目線だな」

「まあ、実際に上から目線なんやけどな」

後ろを見ると、上から木坂が見ていた。まさに上から目線だ。そんな社交辞令言葉と生々しい言葉を交わしつつ、さっさと部屋に行くとする。

足が鍛えられる階段を進み、やっと部屋に到着する。

木坂が鍵を開けようとすると、

「あれれ？ 鍵が」

「忘れたのか？」

「ちやう、開いとる」

ガチャ、と音をたてながらドアを開けると、そこには世にも恐ろしい……、

「き、来てくれて良かったー……。それはそうと遅いじゃないですか！！」

ただの先生がいた。

涙ながらにきよるきよるしては、もう今にも涙腺が制御不能になりそうなくらい目にいっぱい涙を溜めている。

「なんや、来てるなんて珍しいこともあるんやね」

「よ、用事があつたんです！！」

文芸部顧問、藤川ユウコ先生。

「用事？ どんな用事や？」

「本坂君にだけ話があるから、木坂さんは……ちょっといいですか？」

「ん、分かったわ。ほな、うちはジュースでも買いに行く」

「ごめんなさいね」

言った通り木坂は鞆から財布を取り出して、

「ユウコちゃん、二人つきりやからって本坂に変なことしたらダメやからね？」

「し、ししししません！！」

そんなに動揺したら逆に……。いや、なんでもない。

木坂の居なくなつた部室には、俺と先生だけが残る。

「用事つてなんですか」

「本坂君が文芸部として登録されました」

「は、え？」

「電波仮想に行くのは部長の木坂さんだろうと、私は思つてたけど……いいわ、やるからには本気でやってね？」

「い、いや意味がイマイチ把握できないんですが」

外国人に外国語で話し掛けられている、そんな気分だ。

「電波仮想に行つて、好き勝手に戦うだけだと思つ？」

優しく微笑んで先生は続ける。

「簡単に説明したら、勝てば良いんだけどね？ 勝つたらポイントみたいなものが貰えるのよ」

いつしか、サクラがそんなことを言つていた気がする。

「そのポイントは、その人自身の強さと、部室の強さに関係する」

「その人のポイントが高い、それならその人が勝ち続けていて強いつてのは分かりますが、部室の強さつてなんですか」

「あんまり負けばつかりだと、強制的に退部になつちゃうわよ？」

「た、退部?! それなら逃げ続けた方が得じゃないですか」

「あ、そうそう、部費の割り当てもそれで決まっちゃうから逃げてばつかりだと部費がなくなっちゃうわ。それと……」

絶望的な、言葉が、続いた、

「文芸部で登録されてるのは本坂君だけだから、貴方が頑張らないと……ここ、廃部になります」

微笑みながら、そう言われた。

数十分が経過した頃、藤川先生は既に部室にはいない。木坂と二

人だけになっている。

この光景がいつものことにしては、俺の脈拍は異常だ。

木坂部長はいつものように寝ているが、顔が俺とは反対側を向いているので寝顔は見えない。

気付けば溜息を吐いていて、なんかアニメの主人公っぽい俺は余裕をこく余裕がない。

電波仮想、ミサは敵で、サクラに関しては協力的ではあるが、この先も味方とは限らない。

俺が電波仮想に行きポイントを稼がないと部費は貰えず、部費が貰えないとなると、部ではなくなりどのみち廃部。

つまり、俺がなにもしないと待つ結果は廃部になり、俺が行動するとこのままとなるわけだ。

これは、電波仮想Ⅱ部活動となったパターンが連動した場合だけだ。

藤川先生の、ぼつりと言っていたことを思い出す。

電波仮想のポイントは、なにも部活動だけに関係するわけではない。

部活に入っていない、帰宅部にしてみたら意味が無いから。

では、なぜ存在するのか？ それは、最強を決めるから。

……。

分かってる、ここは笑っても良いと思う。

ふはははははははは。

……。

雨音の響く、静寂に近い部室にパシヤリ、と音が聞こえた。

「……おい」

「どしたん」

「その手に持つ携帯はなんだ」

「撮ったんやけど」

「な、なんで俺を撮った？ 怒らないから言ってみる？」

「お、面白い顔やったから」

「削除……するよな」

「保存して携帯をロックしたから削除できへん」

「木坂……お前！」

「あはははっ」

なにが楽しいのかわからないくらい笑う木坂に聞こえないよう、俺は深く短い溜息を吐き出した。

「……………はあ」

そして決心した、文芸部を廃部にするわけにはいかない。

「うん。よしっ、今日は絶好調だよテルユキ君」

ビュンビュンと槍を振り回し、バトンのように扱っている器用なサクラに、

「確かにその槍も元気そうだ」

「やあ、テルユキ君、僕は長い槍さんだよー。今日も君を守るからね」

「サクラじゃなくて……槍さん。貴方は喋れるのか」
「すらすら話せるよー」

「敢えてなにも言わない、言わないからな……」。

「グサツと刺してぶっ殺しちゃうよー」
「言葉が汚い……」

ダ、ダメだ、サクラのペースに乗せられてしまう。

……そういや、ここに来たのは何回目だろうか。
電波妄想。

正式にはレジット、と言うらしいけど、こっちで普及している電

波仮想の名称が俺にはしっくりくる。

ここは物静かな世界。

それは、もう凄く物静か、だと思っていたが。
バン、と銃声のような音が響いた。

屋上にいた俺は、突然に響いた銃声に似た音に挙動不審なアワ
ワ状態。

「よし、行ってみよう」

「お、おう」

サクラは槍を構えて走り出したが、俺は手ぶらで構える物がない。
仕方なく前を走るサクラを見るだけにする。部活を休んでまで、武
器出現方法を教えてもらいに来たのに、早速も問題発生か。

いや、部活を休んで怒っていた……というより拗ねていた木坂か
らして、既に問題発生はしていただろうけど。

どうやって機嫌を戻そう。

我が母校A棟は片仮名の『コ』みたいな校舎の形をしていて、窓
越しの中庭を見通す向こう側に人影が見える。

『28/100』

頭上に表示されている数字。明らかにピンチのようだ。

二人組の男が、一人の少女に襲い掛かっている。多勢で一人を襲
うとは、氣にくわない。

角を二度曲がったところで、全力疾走のサクラに俺は距離を広げ
られる。

「そこまでだ！」

廊下を走りながらサクラが、すぱっと登場したが、俺は登場の夕
イミングを見失い、取り敢えず物影に隠れるごとく無人の教室へ飛

び込んだ。

「うりゃああああ!!」

サクラの雄叫びを聞きながら、どちらかと言うと男二人組の方へ俺は同情する。

ちらつと、角から顔を出して状態を確認したけど、五分五分な戦いだ。

槍はやっぱり至近距離、近付かれることさえなければサクラの一方的な展開で進んでいる。

それでも五分五分、よく二人を相手にして上手く立ち回っているが、数的有利は向こうにある。

相手に挟み込まれないよう、反撃含みの誘導、受け流しつつ払う技術力には普段のサクラとは別人じゃないのかと思えてしまう。

「おいつ、その槍女はシカトして先にそっちの女を倒すっ!」

諦めたのか諦めてないのかは分からないが、ターゲットを変更したようだ。

短剣使いのその君、そういうのは言わない方が良いんじゃないか。

窓際下にぺたんと座り込み、子猫のようにおどおどしている少女はそれを聞いて、ビクツと体を震わせた。手には銀色の拳銃、血の色をした……と言えば大袈裟だが、赤い色が基調の変わったセーラー服を着ている。

なるほど、電波仮想での武器は剣や槍のような近距離だけではないのか。

それにどうやら、服装も仕様となっているらしい。

サクラのドレス、ミサの鎧よろしく的ドレスに、その男二人組、その少女。

俺だけは、高校の制服のままなのは誰の仕様だよ。

そんなどうでもいいことを考えていたが、そろそろ登場しなきゃ気まずいだろうし、飛び入り参加を無許可で行う。

俺は彼女に向かって走り、そのまま子猫を抱き上げるがごとく脇

を抱えて走り出す。

彼女はなんのことだか分かってないにしろ、共に走ってくれているので問題はない。

廊下を走っている最中、後ろから男二人組の音が聞こえたが、振り向いたときにはサクラが廊下を遮っていたので追いつけてはこれないだろう。

離れたところで、適当に近い教室に入り込んで扉を閉めた。

「ここなら大丈夫かな」

「あ、あの……」

着ている服の色と、寸分変わらないくらい彼女は顔を赤らめていた。

「貴方となら……キスマでだったら……できます……」

「……へ？」

自分の胸元に、グツと握り込んだ手を当てながら彼女は言った。

いやいやいやいやいや、何か勘違いされている気がするというか、されていなかったら、こんなことにはならない。

「大胆な人……」

「い、いや。取り敢えず誤解を招いたのなら後で弁解……じゃなくて説明する」

「……はい？」

目をとろんとさせていらっしやっただので、俺は大いに視線を外しつつ、

「その銃、借りてもいいか」

「構いませんよ？」

そつと丁寧に受け取り、

「君はここから動かないこと、だけどさつきみたいに襲われそうになつたら動いて逃げることを、臨機応変に対応すること、良い？」

「……はい」

ちらつと目を見たが、まだとろんとした目をしていたので、巨大な誤解を招いているのだと覚悟しながら俺は教室を出た。「端っこ

に隠れてて」と助言したら、素直にちよこんと端に座ってくれるのを確認しながら。

教室を出た俺は全速力で走る。

いた、まだサクラは戦闘中のようなのだ。

サクラの体力が気になる。頭上を見たが、表示されていないので危険な状態ではなさそうだ。

『13 / 100』

『25 / 100』

常時表示されている、男二人組の方が危険域に達している。

一応、武器は借りたのでなんとかかなりそうだが、初心者の俺に拳銃が扱えるのだろうか。

(でも大丈夫か)

体力が少ない方へ向かう。

相手もこちらの存在に気付き短剣を振り回しながら特攻、そして俺は切り付けられる。

『76 / 100』

削られる体力。

そこに相手がいる、短剣なら、投げない限りは近付くしか攻撃手段はないから。

この男の腕を掴んだ。

確かに俺は、銃なんて撃つたことはないし触ったこともない。それでも当てれる自信がある。まあ、理由は言わなくても良いだろうと思う。

パンツ、と耳が痛くなりそうな銃声が何度も響いた。

『0 / 100』

初めての勝利だろう。

一瞬の残像を残しながら、男は消え去った。

銃を超近距離で発砲するのは、可哀相な気がするけど仕方ない。

もう一人の方を見ると、既に姿は見当たらない。

「どうよっ、私の槍は」

「現実でもそれなりに戦えるんじゃないの」

「わーい」

「簡単な喜び表現どうも」

それなりに重たい拳銃。銀色のそれを構えて、

「さっきの女の子に借りて来たから返しに行かなきゃいけない」

教室の端っこで座っていた、彼女を思い出しながらサクラに同行を促した。

全力で走ったからだろう、息を荒げない程度だが、そこそこに疲労している。

文芸部が四階で日頃からの強制運動のおかげでこの程度で済んでいるのか、それとも無意味なのかは知らない。それでもその疲労を打ち消すだけの高いテンションのような、高揚感と達成感がある。

「そういえば」

「どうしたの？ お腹空いた？」

「……いや、あんまり腹は減ってないぞ」

「私はゆで卵の二個入ったカレーライスが食べたい気分かなー」

「あれは試してみたら美味かったな」

「でしょー？ ぐちゃぐちゃに混ぜたらもつと美味しいよ」

「そうなのか？ 今度それも試してみる。って、俺が聞きたいのはそれじゃない」

廊下を歩きながら、のんきな話しをしてるもんだ、なんて自分にツッコミを入れる。

「聞きたいのは武器の出し方だ」

一歩、また一歩と廊下を歩く。手に持つ拳銃を見ながら。

「バトル学区で手ぶらは危ないもんね、よしならやってみよう」

えいえいおー、とサクラはこれまた気合いの入らない言葉を言った。

「まず、当たり前を当たり前だと思ってみよー」

「当たり前を当たり前に？ イマイチ意味が分からない」

「はい、そして武器を出してみよー。それだけ」

「短い説明だな」

ようするに、あれか、武器が出るのは当たり前だと自分に言い聞かせたら良いんだろうか。

俺は立ち止まり、目を閉じて集中してみた。

当たり前前、当たり前前……。

今から俺の手になんらかの物が現れる、それを掴む、それだけ、よし、現れろっ。

正直な話し、こんなことで成功するとは思っていない。

ただ、拳銃を握っていない手に、なにかの物体を掴んでいる俺がいた。

どうやら成功らしい、あっさりと成功してしまったことに拍子抜けしてしまったが別に良い、結果的にはこうなるんだろうし。

目を開ける。

俺は、長さ三十センチばかりの定規を握っていた。

「なあ、サクラこれって」

「定規だね、線を書く」

「……」

これでどう戦えと言っただ。

間章

「遅いです……」

教室の端に座る少女は、その場所から微動さえせず待機していた。

「……………」

先程の、自分を助けてくれた少年を思い出す。

颯爽と現れ、自らの危険さえ気にせず全力で助け出してくれた少年。

胸が苦しくなる。

ただこの苦しさには幸福が詰まっている、そんな気がしてしまう。

銃声が響いた。

何回も、何回も響く。

こうしてまた、私を助ける為に戦ってくれている。

また胸が苦しくなる。

こんな経験は、今までなかった。自分が自分の心を調べても原因が分からない。

だけど、悪い事ではない気がする。

鼓動の速さと、ほてった体。

風邪を引いた？ 自分の額を触ってみると、確かに熱かった。

でもこんなに急に風邪を引くものだろうか。

風邪ではない、それだけは分かった。ではなんなのか？ それが分からない。

考え込んでいると、教室の扉が開いた。

「ひゃうっ」

自分の驚いた悲鳴。

「だから定規でどう戦えって言っただ」

「投げるんじゃない？ えいって感じで」

「石でも投げた方が良い気がしてきた……」

3話 定規という武器

片手には拳銃、もう片手には定規。多分世界で初なんじゃないのか、この組み合わせを手に持っている人間は。

「なあ、サクラさん」

「どうしたんだいテルユキ君」

「この電波仮想の世界には、どんな種類の武器があるんだ」

「まずは私のランスとか、さっきの人達みたいな直接的な攻撃をする武器だね」

「この銃も？」

「うん。遠距離攻撃の武器は確かに相手に近付かなくて済むけど、そんなに相手の体力を削れない」

「ズルイもんな」

なんて良いつつ、至近距離で遠距離攻撃型の武器を使った俺はなんとも言えない気分になる。

「他には特殊なものもあるよ」

「特殊？」

「そう、特殊な武器。剣やランス、拳銃みたいな武器が直接的な武器だとすると、他には防御に徹底した盾を持つ人もいるし、杖を持つ人だっている」

人差し指をピンツと立て、説明しようとしても言いたそうな……まあ説明はしてるんだが、説明しているサクラはすらすらと俺に教えてくれている。

よくもまあ、色々と知っているもんだ。

「杖は直接的な武器だろ？ 相手の頭をボコス力殴るとか」

「それも出来るけど、普通はそんな使い方しないよ」

「まさか、魔法？」

「その通り」

「なんでもありか……」

手に持つ定規を見る、もしかしたら俺の定規だって、杖のようなそんな特別な物かもしれない。

「この定規はどう戦うんだ？」

近付いてきた目的地。あの少女のいる教室。

「普通に戦うんじゃない？」

俺は目的地である教室の前に立ち、サクラに言葉を返しながら扉を開けた。

「だから定規でどう戦えって言っただ」

「投げるんじゃない？ えいって感じで」

「石でも投げた方が良く気がしてきた……」

ぼやきながらもぼつん、と座っている少女の姿を見付けた。なに事もなかったようで、安心した。

「あ、あのっ！！」

少女は立ち上がり、俺を見ている。

俺はサクラを見た。肩を竦めていて意味が分からない、みたいな顔をしている。

また少女の方を見た。

「お名前は……なんておっしゃられるんですか？」

「本坂テルユキだが」

「分かりました」

何が、分かりました、かさっぱりと分からない。でも何度も頷いで、よしよし、みたいな表情をしている。

「ねー、テルユキ君。もう帰ろうよ、疲れたしお腹減ったー」

「あ、ああ。もう帰ろう」

こっちはこっちで、もうグデーンとしていて、さっきまでのやる気が見受けられない。

こんな対照的な二人を見て、俺は自分の手に持つ、木製の定規に目をやった。

なあ、定規。
俺にどう戦えって言うんだ。

日は進み、一日が経過していた。昨日のことを思い出すと、なにげに大変なような気がしてならない。

「え、つまり自分の武器で勝たないとダメなんですか」
初めて倒したというのに、現実は何とも厳しいわけで。いや、あそこは電波仮想だから現実じゃないのか？ どっちだろう。

「そうです、自分がリアライズした武器でしかダメなんです」
現在職員室、自分のデスクであるう場所に座っている、文芸部顧問の藤川先生はそう言った。

「な、ならポイントは？」

「その拳銃の持ち主の子にいったんじゃないかしら」

「マ、マジですか……」

これは危ない情報を仕入れてしまった、逆に聞きたいが定規で倒される間抜けな人間を見た記憶がない。

どうしよう……。

「まあ、まだまだ時間はあるから気長に頑張つてね？」

「……はい」

落ち込みながら、励まされ、それでも俺の頼りない頭脳は勝算への計算を始めていた。

職員室を退室する、相変わらずというか、どこか遠くから足音が聞こえるだけで声はしない。まさに放課後の学校だ。

まあ、とりあえず部室に行くとしよう。
木坂が待っている、寝ながらだろうけど。

毎日の日課ってわけではないけども、部室に行く為の飽き飽きした階段を進もうとしたら、聞き慣れた奴の声が、後ろから発せられた。

「やつほ、テルユキ君」

少しの違和感を感じた。

「お、サクラか」

その違和感がなんだったかと言うと、現実世界でサクラに会うことと、服装がこの高校の制服姿だったからだ。

電波仮想では、何故か全員の服装がカツコイイ、または可愛い、はたまた伊東ミサのような、その二つが併された服装である。

サクラはお姫様のような服装でいて、そっちに見慣れている俺としては、当たり前であろう制服姿の方に違和感を感じても不思議ではない。

「ちょっとそこを通ったらテルユキ君がいたからさっ、ちよちよいとナンパしちやおうかと」

「ナンパって、おい」

「ジョークだよジョーク、ジャパニーズジョーク」

あははっ、と微笑み、髪を揺らし腹を抱えて笑いだした。ここまですらで笑うと、ただ不審に思う。

俺が冷めた目で見ていると、

「あー、お腹痛いよあ、きよとんってするんだもん」

「……、ってそんなことはどうでもいいんだ」

「……いい加減に笑うのは止めるよ。」

「何か用事でも？」

「用事はないけどさ、今日は電波仮想行くのかなって」

「行くつもりではある」

ただ、その為には一つの難問をクリアしなければならぬ。

「じゃつ、今から行く？」

「待て、部活を休んで来ないといけないからさ。今からそれを言いに行くんだ」

「なるほろー」

うんうんと頷いて、納得しましたとサクラは言ったが、適当に話しを聞いているに違いない。

「だから今から部室に行つて、部長に休みますと言いに行く」

「私も一緒に行こうではないか！」

「……は？」

にこここしているサクラを見て思った、こいつは何をしてでも着いてくるつもりだな、と。

「へえ、私は文章を考えたりするの苦手かな」

階段を進むにつれ、繰り広げられる会話は盛り上がり、騒がしい一階付近を過ぎたさらに上の静かな階では、もはやサクラのオーバーアクションの音だけが響いている。

俺はそのリアクションにリアクションしつつ、曖昧な返事をしては会話を継続させてはいた。

最上階に到着した頃には、俺は相槌をするだけの聞き役になっている。

いつも思う、女の人は話題が豊富なもんだ。

廊下を進むと、そこにはいつもの文芸部があつて、入口があるわけだ。

扉に触れ、開けようとしたら、違和感を感じた。別に扉が変なんじゃない。錆び付いて開かないとか、そういうのではなく。

……これはさっきのサクラを見たときの、変化の違いを見付けたような違和感でもなくて、なんて言ったら正解なんだろう……。

なにかが変だ。

そう……いつもは木坂が一人で座っている、つまりは一人で部室

にいるのに……今は二人いるような。

扉を開けた。

「やっと来たん？ 待ってたで」

木坂がいた、これはいつものことなのでスルー。

問題といえば、

「……ど、どうも」

もう一人いたことだ。

その顔はつい最近見たもので、さらにヒントを言おうとすると、

「あつ、拳銃の子だ」

サクラが後ろから、答え同然の言葉を言った。

「本坂、その人はどないしたん」

「木坂、その人はどうした」

俺達と同じ疑問を同じタイミングで八もらせ、一瞬の静けさが部屋を支配した頃。

遠い場所だろう、廊下から誰かのくしゃみがどこかで響いた。

俺はピンチだ、ピンチをチャンスに変えることができるらしいけど、明確なピンチだけが俺に与えられている。

「つまり、新しい文芸部員を連れて来たんやね？」

法廷の裁判官のような、するどい眼光で俺を見る木坂。

「ま、まだ本人は様子見つてことだけだな」

俺はそうだな、無実の身でありながら痴漢事件の犯人、そのような扱いを受けている。

「よくもまあ、こんな可愛い子を……ふーん」

な、なにかを、疑われている。俺は……痴漢なんかしてないんだ……。

「いやー、いつも木坂さんとテルユキ君が楽しそうにしてるから、私も文芸部員になると楽しい青春を生きれそうだなーと思うっちゃいます」

隣のパイプ椅子に座るサクラはそう言った。ナイス、ナイスだサクラ。良いフォローだと思う。

「ふーん……テルユキ君なんてえらい親しげやなー……」

会議室にあるような、持ち運び簡単なテーブルの向こう側には木坂と拳銃の子が座っている。

そして何故か俺の絶賛した完璧な追撃が、追撃が効いていない。

「ま、ええよ？　うちは部長やけど厳しくはせえへんから」

木坂は目をつぶり、何度も頷いていた。ご丁寧に腕まで組んでいる。

「私もテルユキ君って呼びたいです」

拳銃の子は、全く無関係なことを言い出した。

「良いよ？　呼びなつて私が許すからさっ」

そして何故か、サクラが許可を出した。お前は俺のマナージャーだっけ。

「じゃなくて！　木坂今度はお前の番だ、その子はどうしてここに居るんだ？」

木坂に電波仮想のことは、話していない。彼女が偶然来た可能性もあるけど、部屋に入ったときに彼女は驚いた表情をしなかったところをみると、偶然ではない。

「本坂に助けてもらったんやて、だから恩返ししたいらしいで？」

「はいっ、だからなんでも言うてくださいね！」

腕を組んでいる木坂の隣で、対照的なように、にこやかな彼女を見ていると、何故だろう。やっとまともな人が俺の前に現れたような気がする。

「え、えっちなお願いは……場合によってはダメ……ですよ？」

そうだった、彼女はどこか暴走しやすい人だった……。そこさえなければ、ただ可愛くて大人しい人だ。今、俺を睨んでいる木坂はほっとしておくことにしよう。

その日、俺は部活を休めなかった。

あの状況で休むなんて言ったら、不機嫌な木坂の不機嫌な目線が不機嫌ではない俺の良心に突き刺さり、抜けない気がしたからだ。

久しぶりに、騒がしい部活をしたかもしれない。

なんだかんだでサクラも木坂も、そして拳銃の彼女、姫井ルイさんも楽しんでた。

これが部活動ってやつなんだろうね。

本来なら、部員二人では部活動として活動してはいけない、同窓会が関の山だ。

生徒手帳を見たら分かるが、部活として成り立たせるには、六人以上の人数が必要。

しかし何故だか部員二人でも活動することができている、そんな現状である。

顧問の藤川先生が言うには、昔からある文芸部を廃部にするわけにはいけないという建前があり、電波仮想を知った現在の真実としては、最強を決める電波仮想なら、一人でも多くの参加が必要となるのが本音。

生徒手帳を見ると、部活動に関する注意書きの最後にはこう書い

てある。

【その他、例外あり。】

なにやら、誰かの作戦にまんまと引つ掛かっている気がしてならないけど、参加してしまっただけには諦めるしかないらしい。

帰宅してから風呂に入り、出された課題に手をつけることはしない。寝返りの必要性を考えながら寝返り、さっさと寝ようと目を閉じてその日は寝た。

数日後。

携帯電話の振動によって、起こされる。

目覚ましを設定した覚えはない、となれば、電話かメールのどちらかで、いつもマナーモードの携帯がそれを知らせている。

何も考えずに携帯を取り、寝ぼけた頭は何も考えず画面を見て電話だ、それだけを確認して通話に入った。

「もしもし」

一日の最初の言葉が、もしもしなのはどつだろつ。

『やあ、おはよう』

「なんだミサか」

久しぶりに話した気がする。まあ、電波仮想であんな事があったんだ、フレンドリーに話すには少しなにかが足りない。

『どうだ本坂、電波仮想は楽しかったかい』

「ぼちぼち」

『そうかい』

俺の知っているミサと、変わらないように笑っている。別人だと疑うわけでもないけど、なんかすつきりして安心した。

用件はなんなのか、早々と聞いた。

『学校に来てくれないか』

「……学校に？」

今日は休日、部活にしたって文芸部はなしだ。

「理由は？」

『それはまだ言えない』

……まあ、例え電波妄想で争い事だったとしても、電波妄想に行かない限りは俺もミサもただの人間。争いようがないだろう。

「行くのは良いけど、何時から」

『今から』

「何時まで」

『きつと一日中だろう』

「分かった、今から行く」

『昼食は私が用意しよう』

「あいよ」

それでは、そう言い残され電話は終わった。
さて、まずは起き上がろう。

休日に学校に行く経験が少ないからだろう、頭の中には学校「制服のイメージが定着してしまい、寝ぼけた頭のままでやっていたら制服に着替えてしまっていた。

でも学校に私服もどうか、まあ無難に怒られない制服でも良いかもしれない、そういった結論に至った。

さすがに鞆と教科書まで持っていくと、気が滅入りそうだったから手ぶらで行く。

見慣れた風景とこなれた道を歩き、あまり時間も経過することもなく学校が見えた。

校門が近付き、車の音やら、楽しそうに俺の横を走り去る小学生を見て何となく休日感を思い、学校へと入った。

正面玄関。

そこにミサが待ち構えていた。

「案外早かったね」

「まあな」

ミサの服装も制服。俺の寝ぼけた頭も、役に立つことがあるらしいようで安心した。

「用件は？」

「焦らなくても良いだろう。久しぶりに話したというのに」

「それもそうか」

ぎこちなさはある、それでも長い付き合いだ。今更になって信じられないとか、そういう低レベルな思考はない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9041k/>

電波仮想と助長とパスと

2010年10月9日00時35分発行